

「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」会報 第10号

<巻頭言>

* 記念館建設は北大とのコラボで *

(一社) 新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会
理事長 松井博和

札幌の木々も日増しに緑が深まってきました。コロナ禍や平和を乱す暗い社会情勢の中、皆さま如何お過ごしでしょうか。

さて、今年の会報をお届けいたしますが、この1年、記念館建設に向けてさらなる大きな前進がありました。同封の3つ折りリーフレットにありますように、新渡戸稲造の母校・北大（前身は札幌農学校）が大変心強い協力の手を差し伸べてくれました。2015年に国連が採択した「人類がこの地球上で暮らし続けるための達成目標SDGs」が、新渡戸先生の思想と同じであるからです。

ご存じのように新渡戸先生は、食料生産のための当時最先端の農業経営や政策を究め、遠友夜学校では子女の教育レベル底上げに努め、高等教育や女子教育に多大なエネルギーを費やし、世界平和を希求して東に西に奔走し、札幌農学校の初期より持続可能な社会構築に生涯をかけた行動する総合的知識人です。

この度、その後輩たちが活躍する北大は、SDGsの取組が日本で断トツ1位、世界全体で10位の大学と格付けされました（英国タイムズハイヤーエデュケーション、THEインパクトランキング2022）。新渡戸先生の「学問より実行」によって作られた札幌農学校の元祖DNAが現在までも北大に受け継がれていることが証明されました。SDGsの一語により、新渡戸先生と北大があらためて強く結ばれたのです。新渡戸精神の継承を図り、21世紀の社会教育を進める“場”を作ることが本会の大命題です。これまでは私たちのような市民だけの片肺飛行でありましたが、北大の応援を受け、やっと本来の“あるべき姿”となりましたことを皆さまにご報告申し上げますとともに、心より一緒に喜び合いたいと思います。

昨春よりコロナ禍の中で米国を中心に木材が高騰し、いわゆるウッドショックが到来しました。ロシアによるウクライナ侵攻はそれに拍車をかけ、木材のみならず建築資材全般の高騰を招いております。記念館建設の着手に躊躇する中、北大が持つ“知”と“材”を活かし、持続可能なレガシー「新生・札幌遠友夜学校」の設立のコラボ演出を提案し

てくれました。SDGs担当理事・副学長の横田篤教授からの「設計、建築、研究林木材提供等、北大も全面的な協力を惜しまない」とのお言葉が、どんなにか私たちの活動を勇気づけることでしょうか。演習林現場の調査、必要木材量の見積もりや木材の乾燥方法等、2026年の北大創基150年に合わせた建築プランに沿った始動を新渡戸先生ご夫妻も喜んで下さっているものと信じています。

昨年8月には、北海道農業協同組合中央会（JA）の小野寺俊幸会長、北海道商工会議所連合会の岩田圭剛会頭ともお会いしました。北海道における社会教育の新しい場として大いに期待し、運営においてのご協力をお約束下さいました。明治2（1869）年に開拓使が設置されて北海道の開発に拍車がかかりましたが、それよりも10年以上も前から、幕府は二宮尊徳親子に蝦夷地開拓を命じ、報徳精神を継ぐ弟子の大友亀太郎が札幌の開拓に着手しました（テレビ塔付近の大友堀、後の創成川の一部）。新渡戸先生の父祖とも関わりある（であろう）報徳精神の重要さを知る機会ともなり、北海道報徳社との連携も深まるものと期待しております。

以上のような組織の応援の他、既に多くの北大関係の同窓会、例えば同窓会全体のまとめ役たる校友会エルム・杉江和男会長、最大組織の東京同窓会・横田浩会長、関西同窓会・植松高志会長はじめ、錚々たる方々が顧問として応援くださっています（役員名簿は本会最終ページにあります）。また、ひと言応援のお言葉は、道内はもちろんのこと道外の多くの方々からも寄せられています。合わせてたくさんのご寄付も賜りました。

北海道は、石器文化の人たち、縄文文化の人たち、アイヌ文化の人たち、そして150年ほど前からは新たな人たちと融合しながらも、さらに発展した持続可能な社会を目指した最高の未来文化を創ることが期待されます。SDGsの高い目標達成には、新技術の開発と国民意識の改革が必須です。前者は北大をはじめとする大学の先生たちが、一方、後者は私たち市民が担って、民・学・官・企業の協働による共生社会の実現を目指した社会創造を皆で実行いたしましょう。北海道から日本全体に、そして世界に、新渡戸先生の武士道精神や100数十年前から先生が理想として行動してきたことを伝え実践するのです。

6月19日には横田篤先生によるフォーラムが北大キャンパス内で行われます。7月からは例年のように連続講座が開始されます。11月3日には第5回INAZOサミットが札幌で開催されます。皆さまのご協力を得て、いずれも盛況となりますよう願っています。

本年も皆さんと共に大きな目標に向かって楽しく活動して参ります。一層のご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、一昨年12月から昨年末まで13か月間行われた白糠町代理のクラウドファンディングは、総計301万8千円の多額なご寄付をもって閉じさせていただきました。138名の寄付者および白糠町（棚野孝夫町長）の皆様にご心より感謝申し上げます。

第9回新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会記念フォーラム

＜基調講演概要＞ (2021年6月18日動画撮影)

第9回記念フォーラムは2021年6月18日実施予定でしたが、北海道の新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言延長に伴いやむなく中止となりました。しかし同日全プログラムを動画撮影し7月からホームページで動画配信をしております。この度記念講演をされた青山淳平氏より昨年の基調講演「新渡戸稲造と松山事件」の概要とウクライナ情勢を加味した原稿をいただきました。誌面をお借りし感謝申し上げます。

新渡戸稲造と松山事件

青山 淳平 (作家)

はじめに

今、この原稿を書いている最中も、ひと月前(2022.02.24)に始まったロシア軍のウクライナ侵攻が続いている。冷戦終結から30年、イデオロギーの対立は解消し、科学技術の飛躍的な発達で、世界は一体化とボーダーレス化をつよめている。にもかかわらず武力による主権国家への一方的な侵略戦争が勃発した。軍事・産業インフラにとどまらず、住宅、学校、病院、マーケット、劇場に至るまで、ありとあらゆるものが砲撃とミサイルで破壊・殲滅され、ウクライナの主要都市はすさまじい惨状となっている。わかっているだけでも4,000人を超える市民が犠牲となり、国民の4分の1の1,000万人が平和な生活を奪われて国内外へ避難民となって流出し、その数はなお増え続けている。現代世界で、だれがこのような暴挙と悲劇を予測したであろうか。人類の飽くなきの欲望は地球資源をむさぼり、環境を汚染させ、新型コロナまん延のパンデミックをまねき、さらに今日、核兵器の使用さえも危惧される戦争が引き起こされた。私たちが営々と築いてきた、文化文明そのものが問い直さなれているのではないか。

世界平和の構築に力を尽くした新渡戸稲造博士が遭遇した「松山事件」は、博士の発言通り、軍部ファシズムの台頭で自己肥大化した日本の滅亡を予兆するものであった。この時代、重要な役割を担っていた新聞は、時の権力に追従し、官製の情報を国民に流し、やがて戦意を高揚する機関になり下がることはここに記すまでもない。ひるがえって、ウクライナを侵略するロシアの言論統制とプロパガンダを、私たちは決して「対岸の火事」にしてはならないと思う。いついかなる時代にあっても、新聞をはじめとするマスメディアは社会の木鐸である。権力に寄り添い、商業主義に偏重することがあってはならない。このことこそ、「松山事件」の教訓である。

以下、当時の新聞報道から、この事件を検証する。



1 愛媛での動向（昭和7年2月）と新聞報道

3日（水）に今治市に入った博士は、越智中学校（現今治南高校）で講演した。これは札幌農学校出身の村越銃之輔校長の招きによるもので、博士はこの日、今治泊。

4日（木）の昼前に国鉄松山駅到着。県庁差し回しの迎えの車で道後の「鮎屋」旅館へ入る。部屋には、博士の教え子の菅菊太郎と国松斗升（とます）、また博士を私淑している森恒太郎が待機していた。高名な博士に直接取材しようと、地元の伊予新報と愛媛新報の記者やカメラマンが待ち構えていた。博士はオフレ



昭和7年2月5日 海南新聞

コ（新聞に書かない）という約束で、求めに応じ時局談を語った。少し遅れて海南新聞の記者も取材に加わった。その後、午後12時30分、県公会堂で「日本人の長所と短所」と題して講演した。さらに午後3時、東雲町青年会館で少年団に講話。移動し、午後4時から松山農学校（国松斗升校長、現愛媛大学農学部）で講演し、鮎屋にもどった。この日、松山泊。

5日（金）に松山から八幡浜へ移動し、午後1時に八幡浜町愛宕公会堂で講演。午後3時に西宇和郡少年団に講話をして、陸路宇和島へ移動し、この日、宇和島泊。

この5日の地方三紙（海南新聞、伊予新報、愛媛新報）の朝刊は、松山の県公会堂での博士の講演要旨と、講演に先立ち、鮎屋旅館で取材した博士の時局談を掲載した。この日から、博士糾弾のキャンペーンをはるようになった海南新聞は、次のように報じている。

「共産党と軍閥が日本を危地に導く、上海事件に関する当局の声明は全く三百代言式だ」との三段見出しをつけて、取材した発言内容を活字にした。

「近頃、毎朝起きて新聞を見ると、思わず暗い気持ちになってしまう。わが国を亡ぼすものは共産党か、軍閥かである。そのどちらが怖いかと問われたら、今では軍閥と答えねばなるまい。上海事件に関する当局の声明は全く三百代言的という外はない」。

伊予、愛媛の両紙も博士の来松を報道したが、軍閥批判の取材談話はない。この日以降、海南新聞だけが新渡戸発言を糾弾することに紙面をさくことになる。他紙は沈黙し、講演のために愛媛県各地を訪れた博士の動向も報じていない。海南新聞は、松山にも全国紙が進出して販売競争が激しくなっていたので、新渡戸博士糾弾キャンペーンで部数を伸ばそうという経営上の目論見があったのではないかと推察されている。また全国紙の朝日、毎日には愛媛地方版でも、博士来松や講演のことは報じていない。

6日（土）は午前中に宇和島中学校（現宇和島東高校）で講演。午後12時30か

ら、南予会館で講演、聴衆は1,200余名。この講演後から帰京までの動向は不明。裏付ける記録など資料は見つかっていないが、陸路、乗用車で一時間ほどのところにある山間の宿場町の宇和町へ移動したのではないかと推察される。宇和町の資産家の子弟には札幌農学校に進学する者も少なくなかった。クリスチヤンの住民も多く、街中に立派な教会堂があった。宇和町へ立ち寄ったとすれば、老舗の松屋旅館に泊。

この6日(土)の海南新聞朝刊は、社説に「新渡戸氏の奇怪な主張」の見出しをつけて、オフレコだった博士の発言を取り上げ、「軍閥が国を亡ぼす」と、「上海事変の当局の声明は三百代言」の二点を、不謹慎、非常識な発言として厳しく批判した。

7日(日)は、博士の動向についての新聞報道はない。

しかし、この7日は、前日につづいて再び社説に「新渡戸氏の為に惜しむ」と題して、博士の発言を批判した。その主要内容は次の通りである。「(現代語表記) 貴族院議員新渡戸稲造氏の、愛媛県において、新聞記者に対してなしたる、時局談にふくまれた奇怪なる意見は、果然この国家重大の時局に当面し、国民的意識にもえつつある民衆に対して、異常なるショックを与え、軍部のごときは、痛憤措く能わず、公人たる同氏の軽拳を、糾弾しつつあるものの如くである。(中略)、光輝あるわが帝国の軍隊を目して、極悪危険な共産党と同一視して、その共産党よりは、むしろ一層軍部が国家に禍であるが如く公言するに至っては言語道断といわねばならぬ。(後略)」。

また、この日、松山連隊栗田副官の「新渡戸博士の暴言、思わず無念の涙、将兵の戦死を何と見るか」という内容の「批判談話」を掲載した。

8日(月)の海南新聞朝刊では、一般読者の博士批判の投稿を大きく取り上げている。以下に一部を抜粋。「『わが国を亡ぼすものは共産党か軍閥か』と暴言せし博士は何れの国民ぞ、(中略)、しかるに我国の大難にあたり邦国の不利をあえてす、売国的悪魔、由来わが国の不逞思想は彼奴等如き非国民により造り出さるものと信ず、(中略)、彼奴如きは一日も速やかに我言論界を放逐し、社会の禍根を断たざれば、彼奴等如き非国民思想者の益々増溢せん事を恐れる」。

2 愛媛県在郷軍人会の糾弾

20日(土)に愛媛県在郷軍人会は大会を開き、新渡戸糾弾の以下の内容の宣言を発表した。24日(水)に海南新聞はこの糾弾宣言を掲載した。

「二月四日、新渡戸稲造氏の新聞記者に対して為せる言辞は奇矯にして有識者としての謹慎を欠き又名士なるが故に中外に影響する処少なからず。(中略) 聖旨を奉体し、奉公の一途に邁進しつつあるわれら在郷軍人の起つて新渡戸氏の反省を求め訂正を促し猶肯んぜずば已むなく国民の輿論に問ひ敢て同氏の自決を期せんとす。愛媛県在郷軍人会一同」

25(木)に海南新聞は朝刊で、「新渡戸氏の自決を促す」の見出しで糾弾を強めた。以下に抜粋する。「貴族院議員新渡戸稲造氏が愛媛県主催の講演会の講師として松山市

に來た際、これを訪問したる新聞記者に対してなしたる談話のうちに、『わが国をほろぼすものは共産党か軍閥かである。しかしてその何れかといえ、今では軍閥と答えねばならぬ』と述べ、かつ『上海事件に関する当局の説明は、すべて三百代言的というほかはない』と語ったことは今日の満州事変、上海事件等を中心として時局重大を極め、国民の祖国愛の意識が、しゃく熱高調し、敵愾心のもえさかりつつある際、公人として、先覚者として、一般の師表と仰がるべき新渡戸氏の態度として、甚だしく軽率不謹慎、かつ不用意であったというべく、その影響するところの極めて重大、かつ恐るべきものがあるのを思うて、われ等はつとにこれを指摘し、同氏の失態を糾弾するところがあった。」と縷々主張して以下、新渡戸批判の世論が全国的に高まっていること、中央軍部から松山憲兵隊に真相究明の照会があったことを明らかにした。そして新渡戸発言は国家国民に関する大問題。中央でも各種刊行物で新渡戸発言が攻撃弾劾的になっていることを紹介し、在郷軍人会の宣言を引用しつつ「すべての公職を辞任して、謹慎せよ」と断じた。

3 大阪毎日新聞が愛媛版で新渡戸博士を擁護

28日(日)に、毎日新聞は愛媛版一面全部を使って、新渡戸博士擁護記事を掲載した。海南新聞の報道はまったく誤りであるという要旨。この記事を書いた曾我正堂記者は博士の問題となった発言の当日、鮎屋にはいなかったの、博士に随伴し同席していた三氏に証言を求め、発言の真相を発表した。その要点は、海南新聞は、「日本を亡ぼすものは共産党か軍閥か」その他、捏造した事実と文句をつらね、記事に掲げたが、これは絶対に博士の言葉ではない、ということである。

曾我記者と同記者が証言を求めた三氏の略歴を紹介する。



曾我正堂 (本名 ^{きとう} 鍛 1879.7~1959.12) (写真左) は、愛

媛県西予市三瓶町の農家に生まれ、早稲田大学を卒業後、三井家に勤めていた。明治44年に病気のため帰郷。俳誌「ほととぎす」の創刊者で、正岡子規の友人でもあった柳原極堂が発刊した「伊豫日日新聞」に、大正2年から勤めて主筆となり、毎日新聞愛媛通信部の主任も兼務するようになった。事件当時の毎日新聞での肩書は松山通信部員である。



森恒太郎 (1864.9~1934.4) (写真左) は、26歳の時に失明。郷里の余土村の村長となり、盲人村長として全国的にも知られるようになる。明治41年に自伝『一粒米』を書き、上京して私淑していた新渡戸博士に「序」を懇願。博士は長文のこころのこもった「序」を寄せている。盲人の教育に努め、青少年育成のための道場「天心園」を創設している。

松山事件後に道後湯之町の町長になる。正岡子規に師事し俳号は盲天外。



菅菊太郎 (1875.4~1950.5) (写真左) は新渡戸稲造博士の愛弟子。今治市大三島生まれ。明治27年に札幌農学校に入学。在学中に博士の私邸に出入りし、蔵書を読みふけた。卒業して農商務省の官吏として東京にいた間は、博士の講演先にいつも随行している。官吏を辞めて愛媛に帰り、教育に専念。事件当時は松山農学校教諭。事件後、愛媛県の最南端にある南宇和農業学校へ校長として赴任。後に愛媛県立図書館長となって、図書教育に尽瘁した。農学博士。



国松斗升 (生年月日不明、本籍静岡) (写真左) は、東北帝国大学農科大学農学科卒で、事件当時松山農学校校長であった。その他のことは詳らかでない。本人の写真は農業学校の卒業写真から転載したもの。

以下は、毎日新聞愛媛版に掲載された博士擁護の記事の要約である。

24日(水)の午後3時

に、曾我記者は森恒太郎を道後の天心園に訪問して取材した。森が聞いた新渡戸発言は次の通りである。「博士は国際連盟の満蒙問題に対する認識不足について語り、連盟の委員が調査で中国へ行くときには、博士も出かけて行って満蒙問題に対する連盟の誤解を解きたい。連盟の認識不足の上に上海問題が起きてきた。連盟の態度はますます硬化している。わが国は領土的野心で出兵したのではないことを連盟によく説明する必要がある。博士の軍閥批判発言は、わが国のことではなく、支那の軍閥、世界の軍閥のことについて外国人のいったことを引用して説いたものだ。

三百代言の発言は、支那の宣伝が行き届いていて、西洋人の中には日本の釈明を三百言の如くに誤解している者がいる、という意味で博士は使ったのだ」。

24日午後4時半、曾我は引き続き松山農業学校を訪問し、菅菊太郎に取材した。曾我は、森から聴き取った内容を菅にそっくり伝え、森の証言が間違いはないか、確認した。菅は、「森さんはよく記憶されているね、その通りです」と森の証言を認めた。その他に、伊予史談会が新渡戸博士にご覧いただきたい書類などを陳列していたので、菅はそこへ博士を案内したことや、他の記者に博士が時局談を始めたところへ、遅れて来た海南新聞の記者が入室した、などと曾我に証言した。

25日(木)午前11時半、曾我は愛媛県庁で国松松山農業学校校長に取材した。昨日の24日は、国松自身に講演があり、学校には不在だった。また、この日は県庁へ所要で出向いていた。そこへ曾我が出かけて行って取材することになった。曾我記者は、



昭和7年2月28日 大阪毎日愛媛版

森と菅から聴いたことをそのまま（取材ノートを読み）国松に伝え、真偽をただした。国松は、「私の聞いたのもその通りです。その森さんの話につきます」と応えた。同紙は二人の最後のやりとりを書き、記事を締めくくっている。

曾我「何かご記憶になっていることとお二人のお話以外のことはありませんか」

国松「博士が新聞記者にお会いになったのは十分くらいのもので、そんなにいろいろな話はありませんでした」

曾我「海南新聞に書いてあるようなことが博士のお口から出たものとは常識上考えられませんからね」

国松「実際そうで、あんなことは全然博士のいわれなかったことです」。

前記の通り、この取材特集記事（新渡戸博士擁護）は「海南紙の報道は全然の誤り」の大見出しで、愛媛版朝刊に28日（日）に掲載された。

4 事態収束に動いた軍部と海南新聞の反撃

政府上層部からの働きかけがあったのかどうか、真相はわからないが、軍部は事態の収束に向けて動き出した。2月27日（土）夕刻、東京小石川の新渡戸邸を海軍次官の左近司政三と陸軍省軍事課長の永田鉄山の二人が訪問し、博士に会い、発言の真意を質した。面会后、左近司次官は軍部を代表して次の談話を発表した。

「新渡戸博士が過日、愛媛県下新聞記者と会見の際、我が軍部を誹謗する内容の記事が伝わって世間の問題となり、糾弾運動を起こすというような風評が伝えられるに至った。僕がかねてから博士の如き欧米名士と交際深き紳士に事態の真相を了知してもらって国家のため努力していただきたいと考えていたので、満州問題、上海事変等の経過説明等で本日、陸軍省の永田大佐とともに博士を訪問したところ、博士は右会見談として伝えられたところは、全然博士の真意と異なり、世間の一部に博士の真意を誤解するものがあることを心外として、縷々当時の事情を説明された。（中略）両人（左近司と永田）も釈然として博士の心情を了として重ねて国家のため一段尽力されたき旨申し述べて引き取った」。

この左近司談話は通信社によって配信された。伊予新報は、「軍部との了解なる」という短信、愛媛新報は「益々国家に尽くす」という博士の心情を伝えた。そして大阪毎日には、『新渡戸博士の会見談は全く誤報～訪問した海陸軍当局、国家のため一段の尽瘁を切望、左近司海軍次官談』の大見出しで、上記内容の左近司海軍次官談を掲載した。これに対して、3月1日（火）に海南新聞が総力を挙げて反撃にでた。第一面のほぼ全部をさいて、「新渡戸博士失言問題の顛末」と題して、誤報ではないと主張した。この中で、博士を擁護した三人の他、関係者への取材経過を発表するとともに、松山市内での博士の講演会の発言内容も調べ、同様の論旨の発言があったことを明らかにした。要点は以下の通りである。



「(前略) 海南新聞の報道が事実と相反するがごとき誤想を抱くものがあつては世間を誤ることはなほだしく、かつ本社を誣ゆること著しきものがあるので、本社は事実のいきさつを發表して世間の認識を正確ならしめる義務があると信じる。いうまでもなく博士は大毎の顧問の職にあるので、はからずもこの問題が突発したので同社地方版関係の者は、いざお家の一大事とばかり忠勤ぶりを發揮することとなり同席した地方の議員や教員を強いて捕らえ来たって新聞記者のよくやるいわゆる誘導尋問を行い、思う壺にはめたものであることは新聞常識を有する者には自ら明瞭であつて、事件発生地を区域とする大毎地方版で(中略)、誘導尋問者(曾我記者)が海南紙を誤報と独り決めにしてから尋問に着手している態度が、その質問の言葉の上に明らかに窺われる。(以下略)」。

この反論記事は、大阪毎日新聞愛媛版の森恒太郎の証言に作為と矛盾が数々あることを具体的に記述している。そして最後に曾我記者の質問に答えた菅菊太郎を海南新聞の記者が松山農学校に訪ねて問いただし、事実関係の確認を行っている。菅はの中で、「新渡戸博士は全く学者肌で、すべて正直だから困る」と述べ、事実上新渡戸発言(軍閥批判)を認めことを明らかにした。



昭和7年3月1日 海南新聞

5 帝国在郷軍人会の糾弾と博士の謝罪

3月2日(水)に東京で開催された帝国在郷軍人会第八回評議員会で、新渡戸発言が問題となった。新渡戸発言をそのまま放置すれば、時局重大の折柄、国論を混乱に導くものであるということで意見が一致し、評議員の中から糾弾委員が数人選ばれ、翌3日の夕刻、糾弾委員のメンバーが聖路加病院に入院中の博士を訪れた。メンバーはさっそく博士に発言の真意を質した。博士は弁明したが、松山での講演の速記録を持参していた松山選出の評議員が、「講演のなかにも軍閥という言葉は数多く使われているが、内容の前後から推して明らかに日本の軍閥を指したもので、断じて支那のそれを指したものは受け取れない。このほか暴言と符節を合する言葉は講演中に多々ある」と指摘して真意を質した。博士は狼狽し、「言葉の足りなかったことは何と云っても僕の責任だから明日諸君の集会の席上で陳謝する」と約束した。

翌4日(木)に博士は、在郷軍人会評議員会へ出



昭和7年3月7日 海南新聞

席して陳謝した。当初、「日本を亡ぼすのは軍閥か共産党、また軍当局の声明は三百代言」の発言について釈明して頭を下げ、退場しようとしたところ、評議員からきちんとした釈明を求められ、場内は騒然となった。立ち去りかねた博士は、演壇にもどり、「私の言葉の足らなかったことから世間を騒がせてまことに申し訳がない。よって私は諸君に対して陳謝する」と再び深く頭を垂れた。

6 海南新聞と愛媛新聞 120年史のそれぞれの総括

海南新聞は東京で開催された全国在郷軍人会の席上、新渡戸博士が謝罪したことをふまえて、いわゆる「松山事件」に関する総括記事を掲載した。「兜脱いだ新渡戸博士 全国郷軍に陳謝す 詭弁を弄しても事実は明白」の四段抜きの見出しで、「(前略) ついに天下の裁量によって自ら暴言を肯定することとなったのである。すなわち言葉が足りなかったといい、かつ多数人のまえで頭を垂れて陳謝したことは事実を肯定するものでなくて何ぞ。本社の正しき主張はついにむくいられたのである」と凱歌をあげ、自らが火をつけた一連の新渡戸博士糾弾キャンペーンを締めくくった。

戦後の昭和37年1月、松山事件当時、海南新聞の社長だった香川熊太郎(1866～1945、戦前の実業家、松山市長)の追悼集『香川熊太郎翁』が出版された。当時、海南新聞の記者だった大野香月は、糾弾キャンペーンのことを追悼集の中で、次のようにふりかえている。「同社の糾弾キャンペーンは大きな反響をよび、『非国民を葬れ』との声が日本全土をおおうようになった。博士は日本に隠れるところがなくなり、アメリカに逃亡し、異郷の地で寂しくこの世を去った。博士の発言は祖国を売る行為といわなくてはならない。大胆率直に何ものにも恐れることなく報道したことによって、南海の一隅から発した声が満天下をなびかせ、海南新聞の声価を高めたことは、これまた常人のできることでなく、偉大な新聞本来の使命達成だったことは、特筆大書すべきことだろう」。

再度記すが、この追悼集の出版は昭和37年である。戦前はさることながら戦後であっても事実誤認をひきずり時代認識が著しく欠如したままのこの文章は、戦前の地方のジャーナリズムが極めて独断独善的な上から目線であったことの証左であろう。

海南新聞の後身である愛媛新聞は、平成8年(1996)に出版した『愛媛新聞120年史』において、「新渡戸稲造への糾弾事件」の見出しで事実を詳述し、「残した大きな教訓」として次のように総括している。

「海南新聞の新渡戸糾弾事件は時代に流され、真の国際認識を持ち得なかったジャーナリズムの悲劇でもあった。(中略) 軍国主義の高まりに直面して、ジャーナリズムを支配していたのは沈黙だった。発言の正しさを認識した人は少なくなかっただろうが、それを行動で示すジャーナリズムは、すでに声をひそめていた。『この時期、新渡戸さんもまずいことを言ったものだ』というのが本音ではなかろうか。新渡戸事件が今日に教えるものは少なくない」。

7 おわりに

全国紙といえども戦争批判はできない時代だった。日本の将来への不安から、博士が記者に語った「警世の言葉」は、海南新聞にしてみればまさに鴨葱であったであろう。平和への思いは逆用され、在郷軍人会で侘びた博士の苦渋は有り余るものがある。いっぽう、大阪毎日新聞愛媛版の博士擁護記事も「やらせ」の感はぬぐえず、海南新聞の批判は当たらずと雖も遠からずである。いずれの地方紙も啓蒙的かつ強引な論調で、読者に対して上から目線であり、ジャーナリズムの未熟は否めない。健全で良質なジャーナリズムの存在は、私たちに信託されている。今更ながら認識を新たにする次第である。

<講師略歴>

1949年山口県下関市に生まれる。松山商科大学（現松山大学）大学院修了。高校社会科教諭の傍、小説、評伝などを執筆。第3回稲造サミット・十和田パネリスト。「ソローキンの見た桜」原作者として第1回日本放送文化賞。主な著書：『海市のかなた一戦艦「陸奥」引き上げ』（中央公論新社）、『海にかける虹一大田中将遺児アキコの歳月』（NHK出版）、『海は語らないービハール号事件と戦犯裁判』（光人社）、『明治の空～至誠の人 新田長次郎』（燃焼社）、『小説・修復腎移植』（本の泉社）、『それぞれの新渡戸稲造』（本の泉社）等、他多数。

第9回新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会記念フォーラム動画撮影模様

動画配信へのアクセス道民カレッジ受講生5名を含め170名超に及び好評でした。



<松井博和本会理事長のオープニング挨拶>



<青山淳平氏ご講演>

特別寄稿

「武士道について一稲造『武士道』と『葉隠』、江戸町人に見る武士の姿」

出村克彦（北海道大学名誉教授、本会監事）

（本稿は2021年9月14日実施「札幌遠友夜学校記念館建設支援連続講座」の講演を基にしたものである）

1 武士道について

新渡戸稲造『武士道』（英文）は1900（明治33）年にアメリカにおいて出版された。稲造37歳であった。1938（昭和13）年に稲造の愛弟子である矢内原忠雄の訳書が岩波文庫で出版され、これが決定版となり今日に至っている。稲造の『武士道』は、平成年間に新訳本が新たな出版社から複数の刊行があり、新陳代謝の激しい出版業界において根強い人気のある本である。決してポピュラーな分野の本では無いにもかかわらず版・刷を重ねており驚きである。

小稿の目的はまず『武士道』がこの約100年間に日本においてどのような評価を得てきたのか、特に戦前における評価を観ることである。次に武士道は武士（サムライ、もののふ）階級が登場してから生じた標語で、徳川時代と特に明治時代に強調された言葉であり、武士・武士道がどの様に世の中で理解され、評価（毀誉褒貶）されてきたのかを観ることである。その比較の手段（歴史的史料）として、武士が武士として生きてきた時代に表された『葉隠』、および武士が消滅した明治時代に表された『武士道』と類似の武士道関連の著書、そしてその中間の江戸時代において町人の武士観を井原西鶴、近松門左衛門の作品を通して観ることで、武士・武士道の昇沈を辿ってみるものである。

武士の時代と武士の消長

関ヶ原合戦において家康が勝利をおさめ征夷大將軍となり江戸に幕府を開き、以降1867年に大政奉還をするまでの265年間江戸時代が続いた。大阪冬の陣、夏の陣（1615年）で豊臣家が滅亡し、以降国内において大名同士の戦いは終焉した。これを「元和偃武」と称して江戸時代の太平の世を表した。武士が命懸けで戦場を駆け巡っていた時代は過ぎ去り、このことが武士の精神的な在り方を問うことになる。武士階級が武士の象徴である武（刀）を揮って活動したのは幕末から明治初期であり、この時期に「武士道」という精神的バックボーン、徳目が探求されてきた。したがって武士道は極めて新しい概念であり、武士階級の徳目として明らかにされ、それが敷衍して日本人の精神（例えば大和魂）として形を整え表徴されてきたのは、時代的に見て明治になってからである。

2 武士道研究の3局面

武士道の研究

「武士道」という呼称、すなわち学術タームとして研究され論じられてきたのは、稲造『武士道』がその契機である。『武士道』の出版は日清戦争と日露戦争の中間の時期で、まず世界的に有名になり、そして日本において広まった。「武士道」は稲造の造語ではない。したがって稲造の『武士道』の刊行によって「ぶしどう」が有名になり人々が口にするようになったといえる。ここで謂う「武士道の研究」とは、戦前（明治維新から昭和20年の敗戦まで）から戦後（昭和・平成）の約80年間において「武士道とは何か」という研究を意味する。戦後においては、戦前に比べるとむしろ多くの研究が行われ公表されている。

武士道の研究は三つの局面がある。

（その1）歴史的、文献的研究である。古代の氏族制度から江戸時代までの武士の事跡（合戦、武家の政治）、歴史を史料や文献に求めてまとめた分析である。代表的には井上哲次郎の一連の「武士道」がある。

（その2）武士の共同的社会生活、藩での奉仕として、武士社会の規範、生活様式、心構えの研究である。代表的には『葉隠』、そして大久保彦左衛門『三河物語』がある。これらは武士である個人の自省録であり、それだけに主観的で、生身の率直な意見が吐露され、時代を異にする他者の批評を受け付けられない嫌いがある。

（その3）学問としての武士道。これは稲造『武士道』が代表される。一方では山鹿素行の士道論、陽明学の攻究が、史料、文献および武士の教育実践に於いて論じられた。

武士道のこの三局面の研究は、日本の敗戦による軍国主義の消滅と共に忘れ去られたが、その中で稲造『武士道』と『葉隠』、『三河物語』が残り、今日に至っている。

3 武士道研究、（その1と2）明治・昭和の武士道と『葉隠』

（1）武士道研究（その1 歴史的・文献的研究）

まず、（その1）武士道の歴史的、文献的研究である。

稲造『武士道』が出版されると、日清戦争の勝利、日露戦争への備えをするかのように、蹀を接して種々の武士道関連の出版物が世に現れた。稲造『武士道』に引き続き、井上哲次郎による一連の武士道関係の出版物がまず挙げられる。日本の国民道徳として武士道をとらえる視点では稲造と共通しているが、連綿と続く伝統としての武士道の系譜を歴史的文献に見出し、それを辿ったところに井上の新しさがあるとする（谷口眞子『武士道考』角川学芸出版）。しかしこの記述、評価は正確性を欠いている。井上の著書『武士道』、1901（明治34年）は、陸軍中央幼年学校における講演録をまとめたものであり、井上のこの著書はあまり知られることがない。井上の武士道研究はその後に、『武士道叢書』全3巻、1905（明

治38)年、『武士道全集』全3巻(予定では12巻)、1942(昭和17)年、『武士道の本質』1942(昭和17)年と陸続と出版された。前書二つの全集は、武士道研究の(1)を代表し、古代天照大神の神話から武士階級に関連した文献(史料から軍記物語まで)の系譜を時系列的に網羅して紹介している。その主意は日本陸軍における精神的バックボーンの淵源を武士道に求めることにあった。

井上「武士道」の帰結は、武士道は日本独自の文武両道を兼ね備えた実践徳目であり、その精神は「教育勅語」と「軍人勅語」、「戦陣訓」に生かされていると奨励する。武士道精神という勇ましい美名のもとに、日本軍兵士の痛ましい玉砕を美化、正当化する言辞が、堂々と世の中に流布する時代があったのだ。同じ『武士道』でも彼我の違いは大きい。

(2) 武士道研究(その2 自省録としての武士道)

次に、(その2)自省録としての武士道では、代表的には『葉隠』がある。『葉隠』の研究は戦後に盛んになったが、井上「武士道」とともに日本の敗戦、軍国主義の終焉により武士道の研究は忘れ去られた。しかし、やがて復活して、特に平成時代に様々に論じられてきた。その成果としては日本政治思想史の観点から、丸山眞男が「武士階級の意思(観念)形成」、「武士のエートスとその展開」(『丸山眞男講義録、日本政治思想史』)で歴史的、文献的そして学問的に論じている。今日我々は『葉隠』を岩波文庫の他に『葉隠』(日本の名著7、奈良本辰也他訳、中央公論社)、そして近年、『葉隠』上中下3巻、講談社学術文庫で解説・現代語訳付きの文庫本として入手できる。

稲造『武士道』と対比される『葉隠』を概説する。

成立過程: 佐賀藩士山本常晴(1659-1719)の口授を同藩士田代陣基(もとつら)(1678-1748)が筆録した回顧談であり、成立までに(1710-1716)の7年間を要した11巻の写本である。田代のオリジナルの手沢本は現在所在不明で、数種の写本が伝わっている。その内容は1300項目以上のエピソードが盛り込まれており、武士の思想というよりは、武士の言動、職務上の行動、日常生活の様相などの子細な記録である。その内容、記述は山本の体験、見聞や藩の歴史を反映しているため臨場感があり、生々しい印象がある。

内容: 『葉隠』は1343(ないし1355)のエピソードで構成されているが、その中心テーマ、思想は「武士道と言うは死ぬ事と見つけたり」そして「恋の悟り究極は忍ぶ恋」と要約できる。事実この二つのフレーズは現代においては『葉隠』の代名詞であり、「死=死にものぐるい」という精神の在り方を、人さまざまに自己流に解釈する残地を与えるために活用、乱用されている。『葉隠』を読んでいて異様に感じるのは、切腹が実に安易に行われていることである。切腹=自死は、名誉のため、武士の義のためとして、また切腹=刑罰として行わ

れている。死に関しては様々な名称が唱えられる。脇差心とは立派な武士が生き方の拠り所＝「道」として心掛ける、刀を抜き、人を斬る覚悟である。自死の覚悟として、死身、死習を自己の死と観念して先取りする。また武士の習い、修業として行為、すなわち罪人の斬首、切腹の介錯、「股ぬき」(自分の太股を脇差で刺し抜く肝比べ、我慢比べ)、縛り首、放し討ち(罪人を逃がし、追いかけて斬る行為)など。こうして死に関する行為を実践する「心がけ＝死にものぐるい」をもって日常の心掛けが武士の奉仕の覚悟であるとする。

「恋の至極は忍ぶ恋」とは一つに衆道に通じる恋であり、また主従の間でもこの心掛けで奉仕することである。つまり少しも主君の目に触れずとも、人知れず主君を思い奉仕することの謂いである。

世に出た事情:『葉隠』は秘書として、そして筆写本として一部のみにだけ伝わっていたために、佐賀では大正時代までポピュラーではなかった。印刷本の刊行は明治39年であるが書名と内容が世に広がったのは、昭和14年に岩波文庫に納められたことによる。

『葉隠』が世に広く喧伝され、有名になったのは戦争によってである。1932(昭和7)年の第一次上海事変において、トーチカ、鉄条網、クリークで守られた敵陣に突撃して、自爆により敵陣突破して突撃路を開いた佐賀出身兵士三名があり、爆弾三勇士、肉弾三勇士として報道された。国内では葉隠武士・戦士と英雄視され、祀る廟まで建てられ顕彰された。『葉隠』は軍隊が担ぎ上げて、学徒出陣の際に読むように推奨される扱いとなった。しかし、戦後は一時絶版となったが再版され、また見直され、現在に至っては一種のブームさえ起こし、種々の解説書が刊行されてきた。

4 武士道研究:(その3) 学問として武士道

(3) 学問としての武士道

さて小稿の目的は稲造『武士道』の戦前の評価である。『武士道』は英文で出版されたこともありまず海外で注目を浴びた。日本国内ではどうであったのか。日清・日露戦争に勝利した明治期末に、稲造と井上の武士道がほぼ同時に出版されたが、稲造の『武士道』は英文の出版であったこともあり特殊の扱いを受け、むしろ孤立しておりマイナーな存在だったと評された(佐迫真一『武国日本—自国意識とその罫』)。主流は井上に代表される武士道であった。さらに昭和期になると『葉隠』が主流となった。稲造『武士道』の評価は戦後特に平成時代に盛んになった。稲造『武士道』が戦前マイナーな存在だったといっても、その実態は異なり、矢内原忠雄訳岩波文庫で刊行されて以来増刷を重ねて多くの読者を得てきた。

稲造『武士道』の学問的評価としては、次の文献に優れたものがある。西田直二郎「日本武士道—その歴史的研究」、岩波講座、東洋思想20、昭和11年。西田は『武士道』を武士の精神性を抽出した学術的研究であると高く評価して、次のように論をまとめている。

「・・・此の著作は澎湃として日本国土におしよせた西洋文化が国民へ浸染する時に際し

て、西洋の道德観念と比較して、日本古精神を明らかにしたことは大なる価値がある。而してそれだけ学問として前代幾多の士道論の種類と異なるものをもつ。しかしそれには厳密に言って最早語義的な意味に於いての武士なるものの生活規範ではなく、またその性質は武士の自省録であることではない。武士的精神を攻究する熱心な学徒にとっての述作である。従ってそれだけ多く、純粹に学問としての進歩を見たと言へる。・・・かくて武士道の語は、明治には、却って先の時代のいづれよりも多く、且つ扁々に用いられ、また用いられるに随って、武士階級の道德から或は武士間に発生した道義から、日本の国民道德へと変移していったのである。学問としての武士道も、またかくして実践的な性格を常に断えず進めていったのである。」

現代の評価

小稿の目的の一つである戦前の稲造『武士道』が国内でどう評価されていたのかという点は一応了解できた。戦後とくに平成時代に稲造『武士道』は『葉隠』と共に多く論じられている。最も気になった現代における指摘点、評価では、次のように論じている(種村完司『葉隠の研究—思想の分析、評価と批判』)。曰く、稲造『武士道』は封建時代における武士の徳目について論じたもので、つまり稲造の『武士道』は優れているが封建時代という枠の制約があり、そのことが稲造の限界であり、現代・民主主義の時代の徳目に通じないものがあると。研究者の通弊として、先人の限界を指摘して自己の新たな視点を展開することは常道である。しかしこの指摘はいささかピント外れである。稲造は現代の徳目を論じたのではなく、日本において宗教教育がない環境で、道德教育をどのように行なってきたのかという問いに答えるために書かれたのが『武士道』である。ましてや現代の、民主主義時代にも通用する徳目を述べたのではない。稲造は『武士道』で次の徳目を挙げている。「義・勇・敢為・仁・惻隱・礼・誠・名誉・忠義」である。この徳目と現代の民主主義の徳目である基本的人権、つまり自由・平等・博愛あるいは自由の権利(思想、信条そして言論の自由)との異同は何か。稲造が『武士道』で上げた徳目は、自己が徳目と認め、自己が守るべき徳目である。これに対して、現代の徳目は、自分は勿論であるが同時に他者・社会が認める徳目である。武士道の社会では自己を律し、民主主義の社会では他者の権利を認めることである。稲造が『武士道』で上げた徳目は現代においても些かも時代遅れではないし、むしろ個人の尊厳と道徳性を律する必要な徳目である。

武士の教育と訓練

稲造『武士道』が他の武士道と比較して大きく異なる特長は、「第10章武士の教育および訓練」と「第14章婦人の教育および地位」に現れている。ここで指摘されていることは現代においても十分の考慮すべき課題を含んでいる。

まず「武士の教育」について。稲造曰く、武士は本質的に行動の人である。したがって思慮、知識、弁論そして学問などは、活動の範囲外にあり、武士の職分に関係する限りにおいてこれらを利用した。武士が求めたものは客観的真理ではなかった。

注目すべきはこの後に続く指摘で「軍事教育上その存在が期待せられ、しかも武士道の課程中これを見ざることによって、むしろ注意を惹く科目は数学である。」「武士の教育全体が数学的概念を育成するに適しなかった。」日清、日露の両戦争の中間の時代に、しかも井上の「武士道」により尚武の気概が鼓吹されている時代に、武士の教育に数学の必要性を説く武士道が持て囃されることはないし、ほとんど顧みられないことは明らかである。

数学的センスは「経済」に関連する。稲造曰く「武士道は非経済的である。それは貧困を誇る。」貨幣の計算すなわち経理、財政は重要であるが、それは小身の武士ないし御坊主に掌られた。武士における節儉は経済的理由というよりは克己の訓練が目的であった。奢侈は人に対する最大の脅威であるとして、質素な生活が武士階級に強く要求された。武士階級が金銭と金銭欲を力めて無視することで、金銭に基づく弊害から自由になっていたことが、支配階級として庶民に倫理と道徳の範を垂れることができた。

話柄は飛ぶが、お札の肖像となった福沢諭吉、新渡戸稲造、渋沢栄一は、新しい時代、明治はもはや武士階級は無用の存在であるという認識であった。武士道精神という稲造の『武士道』は根底にあるが、刀に代わる新しい技術（アート）が必要となった。栄一は企業経営の実学、諭吉は学問・経済学、教育そして稲造も学問・農学、教育という実学がそれであった。実学である農学の具体的技術（アート）は、経済学、農業経済学、統計学、簿記、実験である。

経済と数学

稲造が必要とした学問は農学という実学である。その中で数学の役割はまさにこの実学の中に存在していた。具体的には農学における農業経済・経営、開拓事業であるという実学である。農学は理系の学問である。稲造が専攻した農業経済学は農学と農業経済・経営、農政学が融合した学問である。農学は作物生物生産であり、農業経済は農業経営であり、開拓事業は工学である。理系の学問的方法論は実験、観察、観測、そして評価である。農学では、工学のような実験ができない。作物生産は基本的に年に一回である。50年間農業経営を営んでいても50回しか成果を観察できない。その過程で4年に一度は天候による冷害がある。したがってそこには観測による評価ではなく、統計的推計、検定による評価が必要になる。稲造の数学的学問はこの統計学が採用されており、ドイツ留学ではハレ大学（現在マルチンルター大学）において統計学と農業経済学でドクターの学位を得ている。またドイツ（プロシア）統計局への出入りを認められて、統計学の研究、研鑽を実践してきた。稲造は数学を苦手としたが、応用数学である統計学を学び、必要な数学を身に付けてきたといえる。

農業経済では、アメリカ流の農業経営、つまり大規模経営（当時の日本において）では、営利を目的とした農業経営が目的であり、そのためには経済計算に基づく合理的経営をしなければならない。稲造が唱える数学教育とはこうした実学における応用数学としての技術的手段であり、科学的な計数志向である。理系の学問である農学において数学的観点は当然統計学的処理を要する。

また農業経営における数学的思考・観点は経営の営利性である。今流にいうとコスト感覚と収益性を意味する。当時の日本農業における主流の考えは小農主義、さらに農本主義があり、その代表的主導者は横井時敬（榎本武揚と並んで東京農業大学のファウンダー）であった。横井時敬は稲造の農業における営利主義を生涯認めなかったといわれる。しかしこの営利主義には二面性があり、拝金主義としての金儲けを意味する謂いがあるが、これに対しては『武士道』の中で稲造は拝金主義を厳しく批判し、嘆いている。もう一つの意味は、正常な営利主義である。農業経営が持続する going concern としての firm farm となるためには収入から経費を差し引いた余剰、これが利益、利潤であり、この確保を実現するのが営利主義としての農業経営であり、農家の持続的な継続である。戦前シュンペーターのもとで学んだ東畑精一が日本農業の担い手としての農家を評して、正常な経営体ではなく、その日暮らしの「単なる生業としての農業」と称したのは、まさにこの非営利経営としての小農であった。

婦人の教育と地位

次に『武士道』の特長としては、(第14章) 婦人の教育および地位が挙げられる。稲造が武士の奥方について論じる観点は2つあり、武士社会における婦人の役割、心構えと西洋の騎士道(chivalry)のそれとの比較である。この二つの視点は井上の武士道とは大いに異なる。井上は古代の天照大御神から戦国時代の武将・大名の奥方であり、稲造は武士の奥方・子女の役割である。つまり武士階級の中で武家の奥方の役割とその立ち振る舞い、芸事、教養について論じている。その見方は温かい。

女子の役割—内助の功として奉仕の精神は自己の個性を犠牲にして己よりも高い目的に仕えること、すなわちこれはキリストの教えの中で最大であり、人の使命の神聖なる基調となる奉仕の教義であるとする。これは武士道に通底する永遠の真理に基づくものであるとする。キリスト教徒の外国人に武士道を説明するには善い譬えである。この武士道の定義、説明は当時の日本において大いに異なるところである。

稲造は女子の教育を重視した。その思いは後年札幌農学校における遠友夜学校での女子教育の重視、さらに東京女子大学で学長を勤めたことに現れている。

結 『武士道』の影響

武士道と大和魂

武士道、そして大和魂、さらに日本精神、この三者の用語に意味するところは、共通する部分と異なるところがある。用語の定義の差異というよりは人々の理解に違いがあると言った方がよい。稲造の『武士道』に含まれる徳目を意識するのか、『葉隠』にある武士の心構えを思い浮かべるのか。いずれにしる武士(サムライ)、武士道という用語に対して良い印象を持っているのは日本男子なら首肯するであろう。「あなたはサムライですね」と言われて、侮辱や皮肉とを感じる男子はいないであろう。

和辻哲郎が「日本精神」(岩波講座、東洋思想 20)で、「日本精神の言葉は目下流行語の一つである。この言葉は、右翼的、反動的、保守的という標識で理解される。これに対してギリシア精神、ドイツ精神という讃美しても、さほど右翼的反動的とは見なされない」と評して、その解明を行っている。昭和9年という時代はこうした風潮が漂い、その中で武士道、大和魂、日本精神が論じられた時代ということだ。この時代、1920~30年は日中戦争が拡大していった。時代は人々に「武士道」が必要とされ、口実として用いられてきた。2・26事件の青年将校も武士道を口にして自分達の実行の精神とした。

「大和魂」というと本居宣長の和歌(倭歌)「敷島の大和心を人問はば朝日に匂う山桜花」を思い起こす人々が多いであろう。稲造は大和魂を表徴する山桜花を引用して、西洋のバラを比較し、日本人の桜に対する思いを叙している。桜の色、香り、そして散り際の潔さぎよさを賞でている。「花は桜木、人は武士」と称する潔さ、生に執着しない散り際の美を櫻花と武士に託し、それを大和魂と称する。しかし稲造はこのような大和魂に満腔の称賛を与えていない。この章を以下の言葉で締めくくっている。

「しからばかく美しく散りやすく、風のままに吹き散らされ、一道の香気を放ちつつ永久に消え去るこの花、この花が大和魂であるのか。日本の魂はかくも脆く消えやすきものであるのか。原文は、“is this flower the type of Yamato spirit? Is the soul of Japan so frailly mortal?” この修辞は反語である。反語の含意は?

この反語の解釈は二通りある。一つは、否、大和魂はそんな脆くはない、強いものである。これは当時の日本人に容易に受け入れられる表現である。もう一つは、日本人の心(soul)は、そして武士道の心はそんな大和魂ではないと(すなわち宣長の謂ところの大和魂)。深読みすれば、国学者宣長に代表される国粹主義的な大和魂の否定である。英文ならともかく翻訳して日本人に読まれる時に受ける反発を韜晦したとも受け取れる。外国人向けにはこの反語の裏の意味を理解してもらえると期待し、日本人には素直に受け取ってもらえると考えたのか。当時の軍国主義の風潮に抗する注意深い配慮を窺うことが出来る。これは深読みか。

武士道の将来

『武士道』を論じる本で、最終章(16、17章)に触れるのは少ない。ここにこそ『武士道』の神髓が、稲造が云いたかった思いが込められていると思う。稲造が薫陶されてきた武士道の訓えと影響が出ている。

武士道の将来に宗教(キリスト教)の持つ根本原理(博愛、人類愛)を考慮すべきことを示す。そして武士道の残光があるが、その将来を示す不吉な徴候があり、それは強大なる諸勢力となって脅威となっていることを憂慮している。

日本人の心を孕み、花咲かせた武士道は武士階級が消滅した時代に武士道は日暮れつつある。これに代わるべきものを見出せない。今や功利主義、唯物論の損得哲学が登場している。これに抗するに足る強力な倫理体系はキリスト教のみである。これに比すれば武士道は「煙れる亜麻」のごとくである。

キリスト教と唯物主義(功利主義を含む)は世界を二分するであろう。この言葉は現代社会に対する予言であり、その予言は的中している。武士道はいずれの側に与するのか。武士道のストイック主義は滅んだといえるか、それは体系としては滅んだが、しかし徳として生きている。武士道は一の独立せる倫理体系の掟としては消えるかもしれない。しかしその力は地上より滅びないであろう。稲造がキリスト教を挙げるのは、宗派としてのキリスト教ではなく、人種もしくは民族の心に宿る宗教心である。

武士道の倫理は消えるかもしれない、しかしその力は滅びないであろう。封建時代の武士の子として育った稲造の武士道に対する総括である。武士道という観念・イデーに向き合いながら、その内にある徳=愛に目を向ける者と、一方では刀に象徴される武に重きを置く者が生まれる。稲造が武士道とキリスト教(宗教)に親和感を持つのは、ともに至高なる対象に対する自己犠牲と死にものぐるいの献身の心構えにある。

稲造がキリスト教に求めた愛は人類愛、平和である。「武士道」の掉尾を飾るのに、クエーカー詩人の美しき言葉(in the language of the Quaker poet)を引用したのはそれを象徴している。稲造萬里子夫妻はクエーカー教徒である。この教徒は絶対平和主義者であり、良心的兵役忌避者である。

日本が敗戦し、軍国主義が消滅したと同時に、井上哲次郎に代表される戦前の武士道の書物は消え去り、忘れ去られた。その後武士道に関する出版物は後を絶ってしまった。それが1990年頃から武士道関連の本が現われ、それ以降に多くの出版物が増えてきた。その多くが稲造『武士道』の影響下にある。『葉隠』と『武士道』はこれからも long seller として読み継がれていくであろう。

付記:「江戸町人」の稿は略。各章は要約省略してあるため、文意が飛躍している憾みがあるので、フルペーパーは『札幌農学同窓会誌』第25号2021年12月を参照されたい。



<9/14 連続講座「武士道」於・愛生館サロン>



<8/16 新渡戸稲造記念公園清掃>

******事務局だより******

新渡戸稲造記念公園・花壇の清掃・美化活動へご協力を！

月一度本会ボランティアで札幌市から街区公園管理業務委託を受けて遠友夜学校跡地である新渡戸稲造記念公園（中央区南4条東4丁目）の花の手入れ、草取り、ホウキ掃きなどを行っています。公園には近隣の保育園等のお子さん方がたくさん遊びに来て楽しいです。自分の好きなお花も植えられます。ボランティアの語りも楽しいです。赤ちゃんからお年寄りまでの憩いの自然豊かな公園とすべく、6～11月第3月曜10時～12時まで（部分参加も可）、共に体を動かしませんか。道具はすべてあります。軍手のみご持参下さい。

◎ 問い合わせ先：事務局（三上）まで

電話：011-577-1441

メール：info@nitobe-enyu.org

新渡戸稲造読書会（1）のご案内

2016年1月から始まった読書会（1）では、三島徳三先生を座長として、これまで『農業本論』、矢内原忠雄編『植民政策講義及論文集』、『日本文化講義』、『西洋の事情と思想』、『内観外望』、『日本』、『武士道』（対訳版）、冊子内川永一郎編『平民道』（新渡戸基金）を学んできました。

2022年4月からは鈴木範久編『新渡戸稲造論集』岩波文庫を学んでいます。月の担当者がレジュメを開催日の2,3日前に参加者にメールで送り、当日は質疑応答や意見・感想を交換します。良い学びの時です。皆様のご参加をお待ちしています。

◇ 今まで開催日時は、毎月第3木曜日、午後1時半より1時間半程度、場所は愛生館ビル5F(中央区南1西5)「貸し会議室」でしたが、最近はコロナ感染拡大の折、同時間にZoomで行っています。

- ◇ 参加費 500円 Zoomの場合は無料 新規参加希望者は2,3日前までにご連絡を。

新渡戸稲造読書会(2)のご案内

2016年7月から始まった読書会(2)では、これまで藤井茂『新渡戸稲造75話』・『続新渡戸稲造75話』、柴崎由紀『新渡戸稲造ものがたり』、『修養』を学び、現在は『世渡りの道』(文春学芸ライブラリー)を学んでいます。月の担当者が朗読と短い解説をし、参加者で質疑応答や意見・感想を交換します。この本はあと2,3ヶ月で読み終り、次の本は『自警録』(講談社学術文庫)です。心温まる学びです。皆様のご参加をお待ちしています。

- ◇ 開催日時は、毎月第3金曜日、午後1時より1時間半程度、場所は愛生館ビル5F(中央区南1条西5丁目)「貸し会議室」です。

- ◇ 参加費 500円 ※新規参加希望者は2,3日前までにご連絡を。

※ 読書会(1)・(2)とも、問い合わせ先：事務局(三上)まで

電話：011-577-1441 メール：info@nitobe-enyu.org

2021年度 活動報告

- 4月～ 白糠町のご協力により遠友夜学校記念館建設募金クラウドファンディング再開
- 4月7日(水) 記念館建設用地に北海道コカ・コーラボトリング(株)より募金型自動販売機提供・設置
- 4月9日(金) 白糠町・棚野孝夫町長、本会・松井博和理事長のふるさと納税寄付金手交式
- 4月中旬～下旬 「フォーラム」・「連続講座」チラシ作成と業者への発注、諸資料の印刷作業
- 5月上旬 「フォーラム」・「連続講座」チラシ、『会報』第9号、募金趣意書等の発送作業
- 5～11月 (月1回) 新渡戸稲造記念公園清掃・点検(札幌市街区公園管理業務委託作業)
- 5月21日(金) 募金型自販機設置セレモニー(於：新渡戸稲造記念公園)
(北海道コカ・コーラ佐々木康行社長、北大横田篤副学長より祝辞)
- 5月末日 コロナ緊急事態宣言延長により19日予定のフォーラム中止を決定
HP・電話・郵便等で関係者に周知
- 6月19日(土)「第9回記念フォーラム」動画撮影実施、7月よりホームページに動画配信開始
- 7～2月 毎月第2火曜日 札幌遠友夜学校記念館建設支援「連続講座」
(道民カレッジ連携講座) 於：愛生館サロン
- 10月17日(日)「新渡戸稲造博士命日祭ならびに第4回 INAZO サミット in 盛岡」
本会から4名参加
- 3月 白糠町より今年度実施クラウドファンディングによる遠友夜学校記念館建設募金を受理
- 1～2月 新年度の「連続講座」講演講師の依頼

※通年(第3木)新渡戸稲造読書会(1)、(第3金)新渡戸稲造読書会(2)

2022年度 活動計画

4月～5月中旬「フォーラム」・「連続講座」チラシ、「リーフレット」・『会報』第10号等の印刷
発注・製本・発送作業

5月～11月(月1回)新渡戸稲造記念公園・花壇清掃・美化・点検(街区公園管理業務委託作業)

6月19日(日)「第10回新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会記念フォーラム」開催

・開演:14:00～16:30 (開場:13:30) ・場所:北大学術交流会館 1階 小講堂
(入場料:500円) ・オープニング 「新渡戸遠友館(仮称)建設に向けて
(経過・現状報告)」・・・本会・松井博和理事長

・基調講演:「北大発展の歴史とSDGs」 講師:横田篤氏(北大副学長)

7～2月 毎月第2火曜日 新渡戸遠友館(仮称)建設支援「連続講座」(於:愛生館サロン)

11月3日(木・祝)「第5回稲造サミット・札幌」(於:札幌プリンスホテル国際館パミール)

※通年(第3木)新渡戸稲造読書会(1)、(第3金)新渡戸稲造読書会(2)



<5/21 自販機設置セレモニー 松井理事長・横田北大副学長・佐々木社長>



<7/13 連続講座「語り継ぐ～今を生きる アイヌとして」田村直美氏(ウテカンパ代表)> <11/15 新渡戸稲造記念公園清掃>

一般社団法人「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」役員

(2022年5月)

理事長：松井博和 (北大名誉教授、札幌農学同窓会理事長)

副理事長：秋山孝二 (秋山記念生命科学振興財団理事長)

理事：高橋大作 (日本ファーターイル技術部長) 伴 秀美 (星槎道都大特任教授)

久田徳二 (北大客員教授、札幌農学同窓会理事) 平池 暁 (北海道エアポート部長)

三上節子 (新渡戸研究者、文学博士)

監事：藏田親義 (札幌学院大名誉教授)

出村克彦 (北大名誉教授、農業経済)

運営委員：常田益代 細川房子 木村高志 角田貴美 大沼芳徳 遠藤大輔
後呂道徳 宮澤洋子 伊藤めぐ 日向洋喜 高木富美子 中橋賢一
奥村清仁 山田雄亮 山本慎平 村口康博 岡村徳成 有賀早苗
石川満寿夫 入澤孝之 猪倉潤二

顧問：荒川裕生 (札幌大学理事長、元副知事)

石森秀三 (北大特別招聘教授、北海道博物館長)

磯田憲一 (北海道文化財団理事長、元副知事)

植松高志 (北大関西同窓会会長)

大山綱夫 (前北星学園理事長)

黒柳俊雄 (北大名誉教授、農業経済)

佐藤全弘 (大阪市大名誉教授、新渡戸研究者)

杉江和男 (北大校友会エルム会長)

瀬戸 篤 (小樽商大ビジネススクール教授)

棚野孝夫 (白糠町長、北海道町村会長)

丹保憲仁 (北大第15代総長)

寺島実郎 (多摩大学学長)

藤井 茂 (新渡戸基金理事長)

藤田正一 (北大名誉教授、元副学長)

堀田国元 (機能水研究振興財団理事長)

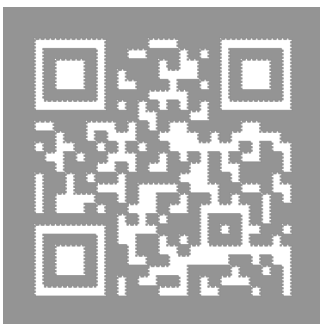
松沢幸一 (元明治屋社長、元キリンビール社長)

三島徳三 (北大名誉教授、農業経済)

三津正人 (札幌農学同窓会関西支部長)

横田 篤 (北大理事・副学長)

横田 浩 (トクヤマ社長、北大東京同窓会会長)



「新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」会報 第10号

発行：2022年5月19日

一般社団法人 新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会

本会活動・本会報に関するお問合せ先：

〒060-0061 札幌市中央区南1条西5丁目8 愛生館ビル

TEL:011-577-1441 FAX:011-241-1150

info@nitobe-enyu.org

<http://nitobe-enyu.org/>